

2023～	ソーシャルワーク論	単位数	履修方法	配当学年
		2単位	SR	1・2年
		担当教員	田中 尚	

※この科目は、2023年度以降入学者に対して開講されている科目です。2022年度以前入学者は履修できません。

■授業のテーマ

ソーシャルワーカーの実践力の向上及び実践環境の構築とそのために必要とされるソーシャルワーク理論

■授業の目的

ソーシャルワークの実践理論・モデルと実務・実践活動を結び付け、理論・モデルに基づく対象把握、実践を行えるようにさせる。

■授業の到達目標

- ・3つの対象レベル（個人・組織・地域）において、ソーシャルワークの実践理論に基づき、対象の統合的な理解・把握、アセスメントができる。
- ・ソーシャルワークの理論・モデルと結び付けて、自身の実践の計画・振り返り・改善を行う。
- ・エコマップ等、視覚でとらえ、説明し、相手の理解が得られるよう、カンファレンス等で使えるためのツールを身につける。

■授業の概要

ソーシャルワークの実践力の向上と人材育成は、一般的な「福祉教育」、教育機関による専門教育、実践現場での研修やスーパービジョンなど、重層的に行われているが、ソーシャルワーク分野は、従来の福祉六法の範囲はもちろん、新たな分野にも広がりを見せており、それらの領域での人材不足は実践現場で深刻な問題となっている。ここでは、学生それぞれが自身の関心分野・領域を定め、それについて文献等の調査を行い、実践力の向上と人材育成に焦点を当て、その歴史的経緯を検討し、また、他国や他分野との比較を試み、ソーシャルワーク実践の課題を考察する。さらに、ソーシャルワーク理論やその価値とするとところを確認し、実践上の現状とその課題を検討する。検討の枠組みとしては、ソーシャルワークの実践力の向上と人材育成の実践に使用する知識・技術の基盤となる自我心理学、認知・行動理論やエコシステム論など、ソーシャルワークの主要理論の適用などを検討する。ジェネラリスト・ソーシャルワークの理解を踏まえて、ミクロ・メゾ・マクロの各視点からのソーシャルワーク実践の理解を深め、価値を生み出すキーワードとして、社会構成主義の観点を取り上げ、実践を批判的に分析することを行う。

■在宅学修15のポイント

	学修のテーマ	学修内容(・キーワード)	学びのポイント
1	社会福祉実践および実践研究の基本的考え方	質的研究、量的研究、文献調査、参加観察、面接、アンケート、フィールドワーク、エスノグラフィ、研究倫理	様々な研究方法があること、研究倫理の遵守が必須であることを理解する。社会福祉研究論文の幾つかを読み、研究論文の例として参考にする。
2	ソーシャルワークの全体像の把握と確認①	ソーシャルワークにおける価値観	社会構成主義とは何か、その歴史的位置付けは何かを文献から知る。
3	ソーシャルワークの全体像の把握と確認②	エコシステム理論	生態学的視点とシステム論について調べる。
4	ソーシャルワークの全体像の把握と確認③	エコシステム理論の実践への適用	ミクロ・メゾ・マクロ、および各システムの相互作用について、実例を用いて考察する。
5	人材育成に関する理論①	認知・行動理論	認知・行動理論のソーシャルワークへの適用について理解する。

	学修のテーマ	学修内容(・キーワード)	学びのポイント
6	人材育成に関する理論②	精神分析・人間性心理学	精神分析的アプローチや人間性心理学のソーシャルワークへの適用について理解する。
7	ソーシャルワーカーの育成(実践力の向上と実践環境)①	教育機関におけるソーシャルワーク教育	参考文献を中心に文献調査より、歴史、組織、カリキュラムなどについて調べる。
8	ソーシャルワーカーの育成(実践力の向上と実践環境)②	現場における育成・訓練	現場における学びの特徴、OJT、Off-JT、Self Development、研修体制について調べる。
9	ソーシャルワーカーの育成(実践力の向上と実践環境)③	スーパービジョン	スーパービジョンの定義、種類、機能、プロセス、技術、倫理、体制について調べる。
10	ソーシャルワーカー育成の歴史・制度	他国との比較	アメリカ、イギリスなど、他国の現状と人材育成やその制度の歴史を文献から学ぶ。
11	ソーシャルワーカーの実践力向上①	個人への介入	心理療法・カウンセリングの諸アプローチ・技術を意識する。
12	ソーシャルワーカーの実践力向上②	家族への介入	家族療法の視点からシステム論的思考のあり方を理解する。
13	ソーシャルワーカーの実践力向上③	組織への介入	社会構成主義の観点から現状を考察する。
14	ソーシャルワーカーの実践力向上④	制度への介入	ミクロ・メゾ・マクロの相互関連性を理解する。
15	ソーシャルワーカー育成上の課題	ソーシャルワーク価値との比較検討	ソーシャルワークサービスの質とソーシャルワーカーの実践力の向上との関連を理解し、人材育成の現状と課題についてソーシャルワークが尊重する価値に基づき批判的に考察する。(「レポート課題」の課題1に相当)

■スクーリング事前課題(学修時間目安:35時間以上)

- ・「在宅学修15のポイント」の2～6までについて学修し、それぞれについて、自身で調べたことを800字程度にまとめ、2～6までそれぞれ800字であるため、全体で4,000字程度とする(対面の演習の1週間前までに提出。)

■スクーリング授業計画

	授業の内容	授業の方法
1	ソーシャルワークの全体像の把握と確認について、講義する。受講生は、ソーシャルワークの全体像の把握と確認を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
2	ソーシャルワーク実践理論の歴史の変遷について、講義する。受講生は、ソーシャルワーク実践理論の歴史の変遷を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
3	ソーシャルワークの実践理論① 自我心理学のソーシャルワークへの適用について、講義する。受講生は、その自我心理学を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
4	ソーシャルワークの実践理論② 認知行動理論のソーシャルワークへの適用について、講義する。受講生は、その認知行動理論を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
5	ソーシャルワークの実践理論③ システム理論のソーシャルワークへの適用について、講義する。受講生は、そのシステム理論を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
6	ソーシャルワークの実践理論④ ストレングス視点について、講義する。受講生は、そのストレングス視点を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
7	ソーシャルワークの展開① 支援を必要とする人との出会い、アセスメント、支援について、講義する。受講生は、その出会い、アセスメント、支援を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド

	授業の内容	授業の方法
8	ソーシャルワークの展開② モニタリング、評価、終結について、講義する。受講生は、そのモニタリング、評価、終結を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
9	ソーシャルワーク実践理論の今後の展開について、提示する事例又は自身の実践に照らし検討する。受講生は、グループワークを用い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習
10	ソーシャルワーカーの実践力とは何か① ソーシャルワークの機能からみる実践力について、提示する事例又は自身の実践に照らし検討する。受講生は、グループワークを用い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習
11	ソーシャルワーカーの実践力とは何か② ソーシャルワーク・スーパービジョンからの理解について、提示する事例又は自身の実践に照らし検討する。受講生は、グループワークを用い、理解を深め、実践への活用を図る。	対面の演習
12	ソーシャルワーカーの実践力とは何か③ ソーシャルワーカーの人材育成からみる実践力について、提示する事例又は自身の実践に照らし検討する。受講生は、グループワークを用い、理解を深め、実践への活用を図る。	対面の演習
13	ソーシャルワーカーの実践力の向上とは何か ソーシャルワーク・スーパービジョンの実践について、提示する事例又は自身の実践に照らし検討する。受講生は、グループワークを用い、理解を深め、実践への活用を図る。	対面の演習
14	ソーシャルワーカーの実践力の向上と実践環境について、提示する事例又は自身の実践に照らし検討する。受講生は、グループワークを用い、理解を深め、実践への活用を図る。	対面の演習
15	まとめ ソーシャルワークの実践と理論の統合（現状と課題）について、提示する事例又は自身の実践に照らし検討する。受講生は、グループワークを用い、理解を深め、実践への活用を図る。	対面の演習

■スクーリング事後課題（学修時間目安：30時間以上）

「レポート課題」の課題2について、「アドバイス」の課題2を参考にして、4,000字程度にまとめること（受講した年度の1月までに提出。当年度の締切日を確認すること）。

■レポート課題

課題1 (事前課題)	ソーシャルワークサービスの質とソーシャルワーカーの実践力の向上との関連を理解し、人材育成の現状と課題について、ソーシャルワークの価値に基づいて考察する。
課題2 (事後課題)	ソーシャルワークの理論とその実践における課題、実践上のジレンマ（ジレンマへの対応を含めて）について考察する。

■アドバイス

**課題1
アドバイス**
授業の到達目標、概要などを読んで、レポートで取り組む内容をできるだけ絞ることが大切です（広すぎると与えられた文字数では、学部教科書レベルの内容をまとめただけになってしまいます）。また、大学から送られてくる参考文献だけでは求められるレポートの質に到達することが困難であるため、自身の関心に従ってレポート課題（テーマ）に関する文献を探し出す努力が必要です。大学からの参考文献は、そのためのガイドとして考えてください。

**課題2
アドバイス**
目標は、ソーシャルワーカーの実践力の向上とその実践環境についての検討・分析能力を高めることにあるため、それを意識して、価値・理論・知識・技術を選び、具体的な理解までを目指してください。上記の内容以外でも構いませんが、実際に実践・事例を検討・分析することを念頭に選んでください。

■評価の方法・基準

- ・事前課題レポート（25%）
- ・全スクーリング（50%）

■参考文献 (*印=大学から送付される必読図書)

- * 1) 久保絃章・副田あけみ (2005)『ソーシャルワークの実践モデル』川島書店.
- 2) 日本社会福祉学会機関誌 (最新版)『社会福祉学執筆要領「引用法」』(コピー)
- 3) 伊藤淑子 (1996)『社会福祉職発達史研究：米英日三カ国比較による検討』ドメス出版.
- ※ 3) の図書は、新品在庫僅重版予定無しのため配本できませんが、非常に大切な内容ですので、中古を入手する、または図書館で借用するなどしてお読みください。
- 4) 好井裕明 (2006)『「当たり前」を疑う社会学』光文社新書.
- 5) Schon, D. (1984) The reflective practitioner: how porfessionals think in action, Basic Books. (=2001, 佐藤 & 秋田訳『専門家の知恵』ゆみる出版.)
- 6) 小池和夫編 (2006)『プロフェッショナルの人材開発』ナカニシヤ出版.
- 7) Polanyi, Michael (1996) The tacit dimension. Routledge & Kegan Pau. (=1980. 佐藤敬三訳『暗黙知の次元』紀伊国屋書店.)
- 8) 金井壽宏 (2012)『実践知』有斐閣.
- 9) Gergen, K. (1999) An invitation to social construction, Sage. (=2004, 東村知子訳『あなたへの構成主義』ナカニシヤ出版.)
- 10) Flick, Uwe (1995) Qualitative forschung. (=2002, 小田他訳『質的研究入門』春秋社.)
- 11) 平山尚他 (1998)『社会福祉実践の新潮流』ミネルヴァ書房.
- 12) 太田義弘 (1992)『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房.
- 13) 遊佐安一郎 (1984)『家族療法入門：システムズ・アプローチの理論と実際』星和書店.
- 14) Toseland, R & Rivas, R. (1998) An introduction to group work parctice (=2003, 野村豊子監訳『グループワーク入門』中央法規出版.)
- 15) Obholzer, A. & Roterts V. Z, (2006) The unconscious at work: individual and organization stress inhte human services, (=2014, 武井麻子監訳『組織のストレスとコンサルテーション』金剛出版.)
- 16) 高良麻子 (2017)『日本におけるソーシャルアクションの実践モデル』中央法規出版.
- 17) Goldstein & Noonan (1999) Short-term treatment and social work practice. Simon & Schuster, inc. (=2014, 福山和女他監訳『総合的短期型ソーシャルワーク』金剛出版.

2023～ 子ども・家庭と女性福祉研究	単位数	履修方法	配当学年
	2単位	SR	1・2年
	担当教員	竹之内 章代	

※この科目は、2023年度以降入学者に対して開講されている科目です。2022年度以前入学者は履修できません。

■授業のテーマ

子ども・家庭・女性の社会的課題について、歴史や社会福祉の理論やアプローチ等を踏まえ、ソーシャルワークの視点から考察する

■授業の目的

児童及びその家族の支援に関して、各種の基礎理論及びソーシャルワーク理論に基づくアプローチの方法等を学習し、実践に活用できるようにする。

■授業の到達目標

- ・理論の成り立ち、主要概念、方法論等について説明できる。
- ・理論・アプローチを踏まえて、自身の実践の省察、評価し、実践の改善課題等について説明できる。

■授業の概要

子どもの抱える課題は、おとなやおとな社会の縮図であり、子どもそのものの問題というよりも、その環境との関連で理解する必要がある。子どもに対する福祉は、社会福祉の歴史でも早くから対応の必要がいわれていた分野でもある。しかしながら、子どもを一人の人格を持った存在として「権利主体」として捉えられるようになるまでの歴史はまだ浅い。それらの歴史的経緯、社会や時代などの環境の変化は、子どもたちの福祉的課題に影響を及ぼしている。それらの考察をしつつ、現代的な課題について理解する。さらに、子どもを取り巻く環境である、家族や未だ子育ての主体者とされる女性にも焦点をあてて、課題を考察していきたい。

子どもや家庭、女性が政策的な課題としても取り上げられている現在、その中でソーシャルワークを展開する意義やその役割について考えるとともに、ともすれば「家庭生活」、いわゆる「家事」「育児」「介護」などの問題は固定的な性別役割分業に未だに縛られており、それが福祉現場においてもだれでもできる仕事とされがちであることから「福祉労働」や「専門性」についても、再考していきたい。

■在宅学修 15 のポイント

	学修のテーマ	学修内容(キーワード)	学びのポイント
1	子ども家庭福祉の理念と考えかた	子どもにとっての生存権、子どもと環境	児童福祉から子ども家庭福祉となった転換点について学習する。子どもを理解するため発達心理などの理論を通じて学習する
2	子ども家庭福祉の歴史 1	児童救済、小さなおとな	子ども家庭福祉のかかわりが「児童救済」から始まった歴史的経緯を学習する。
3	子ども家庭福祉の歴史 2	児童保護、子どもの救済の最優先	「児童救済」から「児童保護」に子どもの福祉的観点が変化したことや戦争時の子どもたちのおかれた状況について学習する。
4	子ども家庭福祉の歴史 3	子どもの権利、子どもの最善の利益	子どもの権利について、第二次世界大戦後から「子どもの権利条約」制定、それ以降の子どものとらえ方を学習する。
5	女性福祉の歴史 1	近代以前の女性の権利、	女性の権利がどのような変遷を遂げてきたのかを

		近代以降の女性の権利、 売春防止法	近代以前とそれ以降の状況について「売買春」を軸 に理解する。
6	女性福祉の歴史 2	売春防止法の制定、女性 の権利、ジェンダー	戦後、売春防止法の制定までの歴史を学習すると ともに、福祉がどのようにかかわってきたかを学習す る。
7	女性福祉の現代的 課題	DV、売買春、母子の貧困、 「困難問題を抱える女性 への支援に関する法律」	家庭内暴力、現代の売買春、母子家庭の貧困など現 代的な女性福祉にかかわる課題について福祉との かかわりで学習する。
8	子ども家庭福祉の 制 度と実施体制	児童福祉六法、実施体制	日本における子ども家庭福祉にかかわる法制度、サ ービス、実施主体、実施体制について学習する。
9	子ども家庭福祉に か かわる専門職	福祉、保健/ 医療、心理、 教育、労働との関連	実際にどのような専門職が子どもや家庭に対して かかわり、どのような連携が行われているのかを学 習する。福祉専門職としてのかかわりの視点を理解 する。
10	子ども家庭福祉の 分野 1	子ども・子育て支援、保 育	キーワードとなっている子ども家庭福祉の分野に ついて、事例等を通して、ソーシャルワークの視点 を支援について学習する。
11	子ども家庭福祉の 分野 2	障がいがある子どもと家 庭、母子保健	キーワードとなっている子ども家庭福祉の分野に ついて、事例等を通して、ソーシャルワークの視点 を支援について学習する。
12	子ども家庭福祉の 分野 3	社会的養護、虐待	キーワードとなっている子ども家庭福祉の分野に ついて、事例等を通して、ソーシャルワークの視点 を支援について学習する。
13	子ども家庭福祉の 分野 4	ひとり親家庭、子どもの 貧困	キーワードとなっている子ども家庭福祉の分野に ついて、事例等を通して、ソーシャルワークの視点 を支援について学習する。
14	子ども家庭福祉の 課題	子どもと環境、ソーシ ャルワークの視点	子どもを取り巻く環境を総括し、あらためてソーシ ャルワークの視点での支援のあり方や福祉専門職 としての役割について再確認を行う。
15	まとめ		子ども家庭福祉や女性福祉をソーシャルワークと の関連で整理し、研究課題を考える。 まとめとして、社会福祉の歴史的な展開を踏まえ、 児童救済、児童保護、児童の人権と発展してきた歴 史について概観したうえで『子ども家庭福祉』の今 日の課題を取りあげて、考察しなさい（あるいは、 女性福祉の史的展開を踏まえ、女性福祉の今日的 課題を取りあげて、考察しなさい）。(「レポート課題」 の課題 1 に相当)

■スクーリング事前課題（学修時間目安：35 時間以上）

- 1) 「在宅学修 15 のポイント」の 1～14 までを学修し、それぞれにまとめる（対面の演習の 1 週間前に提出）。
- 2) 「レポート課題」の課題 1 について、「アドバイス」の課題 1 を参考にして、4,000 字程度にまとめること

(「在宅学修 15 のポイント」の 15 に相当。対面の演習の 1 週間前に提出)。

■スクーリング授業計画

	授業の内容	授業の方法
1	子ども家庭福祉の理念について講義する。受講生は、子ども家庭福祉の理念を学び、確認テストに解答する。	オンデマンド
2	子ども家庭福祉の史的展開について講義する。受講生は、子ども家庭福祉の史的展開を学び、確認テストに解答する。	オンデマンド
3	(2 回に続き)子ども家庭福祉の史的展開について講義する。受講生は、子ども家庭福祉の史的展開を学び、確認テストに解答する。	オンデマンド
4	女性福祉の史的展開について講義する。受講生は、女性福祉の史的展開を学び、確認テストに解答する。	オンデマンド
5	子ども家庭福祉及び女性福祉に関するソーシャルワークの理論やモデル、アプローチについて講義する。受講生は、その理論やモデル、アプローチを理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
6	(5 回に続き)子ども家庭福祉及び女性福祉に関するソーシャルワークの理論やモデル、アプローチについて講義する。受講生は、その理論やモデル、アプローチを理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
7	子ども家庭福祉の分野における子育て支援、保育について、理論や支援アプローチを用いた事例研究を行う。受講生は、グループワークを用い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習
8	子ども家庭福祉の分野における障がいがある子どもへの支援と母子保健について、理論や支援アプローチを用いた事例研究を行う。受講生は、グループワークを用い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習
9	子ども家庭福祉の分野における虐待と社会的養護について、理論や支援アプローチを用いた事例研究を行う。受講生は、グループワークを用い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習
10	子ども家庭福祉の分野におけるひとり親家庭と子どもの貧困について、理論や支援アプローチを用いた事例研究を行う。受講生は、グループワークを用い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習

■スクーリング事後課題 (学修時間目安：30 時間以上)

「レポート課題」の課題 2 について、「アドバイス」の課題 2 を参考にして、4,000 字程度にまとめること(受講した年度の 1 月までに提出。当年度の締切日を確認すること)。

■レポート課題

課題 1 (事前課題の 2)	社会福祉の歴史的な展開を踏まえ、児童救済、児童保護、児童の人権と発展してきた歴史について概観したうえで、「子ども家庭福祉」の今日的課題をとりあげて、考察しなさい。(あるいは、女性福祉の史的展開を踏まえ、女性福祉の今日的課題を取り上げて、考察しなさい。)
課題 2 (事後課題)	子ども家庭福祉と女性福祉における分野を一つとりあげて、社会福祉専門職の役割と意義の課題について論じなさい。

■アドバイス

(課題 1)

社会福祉の歴史的な展開の理解と、子どもが歴史的にどのような存在であったのかを「権利」という切り口で学習してみてください。また、女性福祉に関心のある方は「売春防止法」が制定されるまでの廃娼の歴史と「困難問題を抱える女性への支援に関する法律」までの流れを踏まえて考えると良いでしょう。

(課題 2)

子ども家庭福祉や女性福祉の実践にかかわっている方は、自身の実践体験も踏まえて、考えてみると良いと思います。また、実践にかかわっていない方は、参考文献などの事例からどのような課題があるかを整理してみましよう。

■評価の方法・基準

- ・事前課題レポート (15%×2)
- ・全スクーリング (50%)
- ・事後課題レポート (20%)

■参考文献 (*印=大学から送付される必読図書)

- * 1) 山縣文治著『子ども家庭福祉論』ミネルヴァ書房、2018 年
- * 2) 杉本貴代栄編著『女性学入門－ジェンダーで社会と人生を考える 改訂版』ミネルヴァ書房、2018 年
- 3) 柏女霊峰著『これからの子ども・子育て支援を考える』ミネルヴァ書房、2017 年
- 4) 日本弁護士連合会子どもの権利委員会編『子どもの権利ガイドブック (第 2 版)』明石書店、2017 年
- 5) 松本伊智郎編『「子どもの貧困」を問い直す－家族・ジェンダーの視点から』法律文化社、2017 年
- 6) 児玉勇二『子どもの権利と人権保障－いじめ・障がい・非行・虐待事件の弁護活動から』明石書店、2015 年
- 7) 林千代編『婦人保護事業 50 年』ドメス出版、2008 年
- 8) 森田ゆり『子どもと暴力』岩波書店、1999 年
- 9) 子どもの貧困白書編集委員会編『子どもの貧困白書』明石書店、2000 年
- 10) 荒巻重人ほか編『外国人の子ども白書』明石書店、2017 年
- 11) 相沢仁ほか『やさしくわかる社会的養護シリーズ 1 ～ 7 』明石書店、2014 年
- 12) 滝川一廣ほか編『子どもの心をはぐくむ生活』東京大学出版会、2016 年
- 13) 宮本みち子編『すべての若者が生きられる未来を』岩波書店、2015 年
- 14) 宮本みち子編『下層化する女性たち』勁草書房、2015 年
- 15) 日本弁護士連合会編『女性と労働』旬報社、2011 年
- 16) 施設で育った子どもたちの語り編集委員会編『施設で育った子どもたちの語り』明石書店、2012 年
- 17) 須藤八千代編『母子寮と母子生活施設のあいだ』明石書店、2007 年
- 18) 日本子どもを守る会編『子ども白書』本の泉社 各年版、日本婦人団体連合会『女性白書』ほるぷ社 各年版など

2023～	高齢者福祉研究Ⅰ	単位数	履修方法	配当学年
		2単位	SR	1・2年
		担当教員	石附 敬	

※この科目は、2023年度以降入学者に対して開講されている科目です。2022年度以前入学者は履修できません。

■授業のテーマ

老いの諸相と高齢者支援の課題

■授業の目的

- 1) 社会老年学 (social gerontology) を中心とした老いに関する諸理論、超高齢社会の課題について学ぶこと。
- 2) 高齢者の生活を支える地域包括ケアシステムの理論と課題について学ぶこと。

■授業の到達目標

- 1) 老いに関する諸理論について理解し、身近な事例を題材に検討することができる。
- 2) 超高齢社会の課題について、考えを述べることができる。
- 3) 地域包括ケアシステムの理論と課題について述べるができる。

■授業の概要

日本の老年人口比率は29%を超え、4人に1人が高齢者となり、さらに男女ともに多くの人が人生80年以上を享受できる時代となった。一方で、家族機能の脆弱化、高齢者のみ世帯の増加など、高齢者を取り巻く環境は厳しさを増している。今後、人々が安心して高齢期を迎えることができるために、何が必要なのか？

本講義では、①まず初めに、社会老年学を中心とした老いに関する諸理論の学びを通じて、幸せに老いるためには何が重要なのかについて、身近な事例も活用して考えていく。②次に、人々がそれぞれ相応しい場所で老いていく (aging in place) ことを支える、地域包括ケアシステムの理論と現状について学ぶ。

■在宅学修15のポイント

	学修のテーマ	学修内容(・キーワード)	学びのポイント
1	老年学とは	老年学の定義、テキストの構成	老年学はどのような学問であるか学ぶ。 【テキスト1)の序章】
2	老年学の研究方法	実証研究のプロセス、文献レビュー、量的・質的研究	老年学の研究方法について学ぶ。 【テキスト1)の第1章】
3	老いと社会	老年社会学の理論、高齢期の社会関係、エイジズム、社会参加	老年社会学の理論と、高齢期の社会関係について学び、高齢者や家族への支援との関連性について考察する。【テキスト1)の第4章】
4	老いと健康	老化と寿命、老化にともなう身体の変化、高齢期の傷病	老化にともなう身体の変化、高齢期の傷病の特徴について学び、高齢者や家族への支援との関連性について考察する。【テキスト1)の第2章】
5	老いと心理	生涯発達、感覚、記憶、孤独、コミュニケーション	老化と障害発達、感情と孤独、について学び、高齢者や家族への支援との関連性について考察する。 【テキスト1)の第3章】
6	高齢者と家族への支援、死生学	高齢者と家族を支える制度、福祉の実践方法、死生学	高齢者と家族を支える制度と支援方法について学ぶ。【テキスト1)の第5、6章】

	学修のテーマ	学修内容(・キーワード)	学びのポイント
7	事例検討①	オーラルヒストリー	あなたが幸福だと思う身近な高齢者に、幼いころから今までの人生について話を聴いてみてください。そして、老いの諸理論を用いて、その方がなぜ幸福でいるのか、高齢者やその家族への支援を展開する上での視点について考察してください。身近に対象者がいない場合は、高齢者の人生が書かれた書籍を読んで考察してください。
8	事例検討②	オーラルヒストリー	つづき
9	地域包括ケアシステムの背景	日本の現状と背景	地域包括ケアシステムに関して、日本の現状と背景について学ぶ。 【テキスト2）第1章】
10	地域包括ケアをめぐる議論①	integrated care、定義	地域包括ケアの重要な理論である integrated care とチームアプローチについて学ぶ。【テキスト2）第2章1節】
11	地域包括ケアをめぐる議論②	2006年モデル、2012年モデル	日本における地域包括ケアシステムの変遷についてまとめてください。 【テキスト2）第2章2節】
12	地域包括ケアシステム構築の方法①	諸外国の例	諸外国の例を基に、地域包括ケアシステム構築の方法について学ぶ。 【テキスト2）第3章1節】
13	地域包括ケアシステム構築の方法②	日本の例	日本の例を基に、地域包括ケアシステム構築の方法について学ぶ。 【テキスト2）第3章2節】
14	地域包括ケアシステムの課題①	認知症高齢者の在宅支援	地域包括ケアシステムの課題について学ぶ。 【テキスト2）第4章1節】
15	地域包括ケアシステムの課題②	ケアマネジメント、評価体制	地域包括ケアシステムの課題について学ぶ。(つづき) まとめとして、あなたが幸福だと思う身近な高齢者の人生を事例として、その方がなぜ幸せな老後を過ごしているのか、老いの諸理論、ソーシャルワーク理論・アプローチを用いて考察する(「レポート課題」の課題1に相当)。 【テキスト2）第4章2～3節】

■スクーリング事前課題(学修時間目安:35時間以上)

- 1)「在宅学修15のポイント」の1～14までを学修し、その内容をA4 3枚程度にまとめる(対面の演習の1週間前に提出)。
- 2)「レポート課題」の課題1について、「アドバイス」の課題1を参考にして、4,000字程度にまとめること(「在宅学修15のポイント」の15に相当。対面の演習の1週間前に提出)。

■スクーリング授業計画

	授業の内容	授業の方法
1	本科目の概要、学修の進め方、事例研究の方法について共通理解を図る。受講生は、本科目の概要等を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
2	日本の社会の高齢化の現状と諸課題について講義する。受講生は、日本の社会の高齢化の現状と諸課題を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
3	老年社会学の理論、高齢期の社会関係、高齢期の諸課題について講義をする。受講生は、老年社会学の理論、高齢期の社会関係、高齢期の諸課題を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
4	老いの総合的理解、オーラルヒストリーを基にして講義する。受講生は、老いの総合的理解、オーラルヒストリーを理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
5	高齢者保健福祉の発展過程について講義する。受講生は、高齢者保健福祉の発展過程を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
6	地域包括ケアシステムとその課題について講義する。受講生は、地域包括ケアシステムとその課題を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
7	各自取り組んだオーラルヒストリーを素材にした対象高齢者の事例を基に、老いの諸理論、ソーシャルワーク理論・アプローチを活用した考察、高齢者と家族への支援の課題について発表、グループディスカッションを行い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習
8	(7回に続き)各自取り組んだオーラルヒストリーを素材に対象利用者の事例を基に、老いの諸理論、ソーシャルワーク理論・アプローチを活用した考察、高齢者と家族への支援の課題について発表、グループディスカッションを行い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習

	授業の内容	授業の方法
9	各自の居住地の地域包括ケアシステムの現状と課題について統合理論とチームアプローチに関連付けた考察を基に、発表とグループディスカッションを行い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習
10	(9回に続き) 各自の居住地の地域包括ケアシステムの現状と課題について統合理論とチームアプローチに関連付けた考察を基に、発表とグループディスカッションを行い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習

■スクーリング事後課題（学修時間目安：30時間以上）

「レポート課題」の課題2について、「アドバイス」の課題2を参考にして、4,000字程度にまとめること（受講した年度の1月までに提出。当年度の締切日を確認すること）。

■レポート課題

課題1 (事前課題の2)	あなたが幸福だと思う身近な高齢者の人生を事例として、その方がなぜ幸せな老後を過ごしているのか、老いの諸理論を用いて考察してください。
課題2 (事後課題)	地域包括ケアシステムとは何か。そして、日本に導入された背景と、これまでの変遷について述べなさい。

■アドバイス

**課題1
アドバイス** 高齢者（できれば後期高齢者が望ましい）に、その方の幼少期から高齢期までの人生を何回かに分けて（1回当たり1時間以内）聴いてみてください。ポイントはあなたの質問に対して、自由に語っていただくことです。聴きとった内容をもとに、その方の人生をオーラルヒストリーとしてまとめてください（これは提出の必要はありません）。これを事例として、レポートではオーラルヒストリーを簡潔にまとめて、老いの諸理論を活用して考察を述べてください。文中では個人が特定できないよう、仮名やアルファベット表記などで匿名としてください。該当する協力者が得られない場合は、高齢者の人生について書かれた書籍を事例として使用してください。

**課題2
アドバイス** テキスト2)を丁寧に読んで、要点をまとめてください。また、厚生労働省のHPや参考文献で提示した特集論文なども参考にすると良いでしょう。

■評価の方法・基準

- ・事前課題レポート（15%×2）
- ・全スクーリング（50%）
- ・事後課題レポート（20%）

■参考文献（*印=大学から送付される必読図書）

- *1) 杉澤秀博、長田久雄、渡辺修一郎、中谷陽明編著『老年学を学ぶ 高齢社会の学際的研究』桜美林大学出版会、2021年
- *2) 筒井孝子著『地域包括ケアシステム構築のためのマネジメント戦略』中央法規、2014年
- 3) Robert C. Atcheley & Amanda S. Barusch (2004) Social Forces and Aging: An Introduction to Social Gerontology 10th ed. Thomson Learning. (= 2005, 宮内康二編訳『ジェロントロジー～加齢の力学～』きんざい.)
- 4) 「特集 地域包括ケアシステムの構築と深化：課題と展望」『老年社会科学』39巻4号、p.415-459、日本老年社会学会、2017年

2023～ 障害者福祉研究Ⅰ	単位数	履修方法	配当学年
	2単位	SR	1・2年
	担当教員	三浦 剛	

※この科目は、2023年度以降入学者に対して開講されている科目です。2022年度以前入学者は履修できません。

■授業のテーマ

ソーシャルワーク理論に基づく「障害者福祉（障害者支援）」研究

■授業の目的

ソーシャルワークの視点から障害者福祉を整理検討し、ソーシャルワーク理論に基づくアプローチの方法を学び、実践活用にも結びつけられるようになることを目的とする。

■授業の到達目標

- ・ソーシャルワークの枠組みを理解し、障害者福祉領域での諸問題を解決するための研究方法を修得する。
- ・基礎的なソーシャルワーク研究方法を習得し、障害者福祉研究のデザインをすることができる。

■授業の概要

「障害者福祉」とは障害がある方への支援施策の全体をさすことばとして使われてきたが、その一領域であるソーシャルワークは、この分野で未だに明確な固有性を示せていない。ここではソーシャルワークの視点からその歴史的展開や理念についてとらえ直し、障害がある人にかかわるソーシャルワークの意味と価値を考える。つぎにソーシャルワーク理論からそのアプローチについて分析、検討し、ソーシャルワーク・モデルを開発する。その枠組みからこれまでの施設入所などの支援を分析し、その方法、技術について再考する。

障害がある人たちへのソーシャルワークのもう一つの課題として、重度の障がいがある人をどうとらえるかがある。アドボカシー、意思決定支援と社会貢献の視点から、実践活用にも結びつくように、直接的支援のあり方や質に関する議論も進めていきたい。

■在宅学修 15 のポイント

	学修のテーマ	学修内容(キーワード)	学びのポイント
1	生活困窮と障害	遺棄、虐待、働けない貧民、生存権	生存権の確認(20世紀初頭)までの障害がある人のおかれた環境について学修する
2	人権と障害	人権思想 リハビリテーション	人権思想の興りから第二次大戦後までの展開について学修する
3	保護偏重の施策について	大規模施設、コロニー、分離処遇など	北欧やアメリカでの施設の大規模化、保護偏重化への過程を分析し、学修する
4	ノーマライゼーションの理念	1959年法 脱施設、施設解体	保護偏重に対するノーマライゼーション理念の興りとアメリカでの展開について学修する
5	「自立」概念の拡大	IL運動、消費者主義	IL (independent living)運動が自立の概念を拡大していく過程を学修し、障害学への展開にも触れる。
6	地域支援と契約制度について	社会福祉法、契約制度、応益負担	日本を中心に近年の制度動向についてキーワードを中心に学ぶ
7	ソーシャルワークの歴史	社会問題、ケースワーク	障がいの問題を社会問題ととらえ、人と環境の相互作用を視点にソーシャルワークとの関連性を学ぶ

8	ソーシャルワークの枠組み	生態学的視点、生活モデル、環境調整、エンパワメント	ソーシャルワークの視点、モデル、アプローチについて学び、ICF との親和性を中心に、障害者支援におけるソーシャルワークの意味を知る
9	ソーシャルワークの視点について(エンパワメント、アドボカシーの概念)	アドボカシー、エンパワメント、ストレングス	近年、障害者福祉の中心的概念となったアドボカシーとエンパワメント、ストレングスについて学ぶ
10	ソーシャルワークの展開について(1)	ミクロ・レベルからマクロ・レベルへの連続体、生物・心理・社会モデル、障害受容、家族支援、SST、認知行動療法など	人と環境との相互作用が、個人、家族、地域、制度などのレベルへ連続していることと、その支援展開の実際を学ぶ。
11	ソーシャルワークの展開について(2)	社会資源開発、ネットワーク形成、チームアプローチ、コーディネーション	障害がある人の地域支援活動に必要な、ソーシャルワークの開発機能について、基礎知識、方法を学ぶ
12	ソーシャルワークの展開について(3)	ソーシャル・アクション、ネゴシエーション	開発機能に必要とされる関連技術の基礎知識と方法を学ぶ
13	ソーシャルワークの展開について(4)	ケアマネジメント、障害者相談支援事業	障害者支援の実際をケアマネジメント・プロセスに沿って理解する
14	ソーシャルワーク実践活用へ向けて	事例研究法	ソーシャルワーク実践における障害者支援の実際について事例研究を中心に学び、実践活用の方法を考える。
15	まとめ		ソーシャルワークと障害者支援の関連性を明確にしながら、ソーシャルワークの枠組みを通して障害者支援を再構築してみる。まとめとして、「障害者支援の史的展開を踏まえ、ソーシャルワークとの接点を確認し、障害がある人へのソーシャルワーク・アプローチによる支援モデルを考える」(「レポート課題」の課題1に相当)

■スクーリング事前課題（学修時間目安：35 時間以上）

- 1) 「在宅学修 15 のポイント」の 1~14 までを学修し、それぞれにまとめる（同時双方向演習の 1 週間前に提出）。
- 2) 「レポート課題」の課題 1 について、「アドバイス」の課題 1 を参考にして、4,000 字程度にまとめること（「在宅学修 15 のポイント」の 15 に相当。同時双方向演習の 1 週間前に提出）。

■スクーリング授業計画

	授業の内容	授業の方法
1	障害がある人へのかかわりの歴史と障害概念の変遷と近年の到達点(ICF の考え方、差別禁止の方向性、障害学の展開など) について講義する。受講生はその歴史と障害概念を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
2	障害者支援におけるソーシャルワーク・アプローチの起源について及びソーシャルワークの理論と枠組み（生態学的視点、生活モデル、一般システム理論など）について講義する。受講生はソーシャルワークの歴史的展開を理解し、その起源と障害者支援の関連性に着目し、またソーシャルワークの視点、モデル、アプローチと障害者支援の関連性を把握し確認テストに解答する。	オンデマンド

3	障害者支援におけるソーシャルワークの視点（アドボカシー、エンパワメント、ストレングス）について講義する。受講生はアドボカシー、エンパワメントといったソーシャルワークの視点が、障害者支援にどのように具体化するかなどを理解した上で、確認テストに解答する。	オンデマンド
4	障害者支援におけるソーシャルワークの展開（障害受容、SST、認知行動療法、家族システムズなど）について講義する。受講生は、障害児者への直接的支援として、その方法を具体的に理解した上で、確認テストに解答する。	オンデマンド
5	障害者支援におけるソーシャルワークの展開（意思決定支援）について講義する。受講生は意思決定支援の意味、意義を理解した上で、その具体的実践方法について検討し、確認テストに解答する。	オンデマンド
6	障害者支援におけるソーシャルワークの展開（社会資源開発、チームアプローチ、多機関連携と地域支援システム）について講義する。受講生はチームアプローチなどの方法を具体的に理解し、その実践方法を検討し、確認テストに解答する。	オンデマンド
7	ソーシャルワーク理論・アプローチによる支援の実際（生活支援、ケアマネジメント）について、提示する事例に照らし検討する。その際にはグループワークやロールプレイを用い、理解を深め、実践活用を図る。	オンラインによる 同時双方向演習
8	ソーシャルワーク・アプローチによる支援の実際と活用（働くこと、日中活動への支援）について、提示する事例に照らし検討する。その際にはグループワークやロールプレイを用い、理解を深め、実践活用を図る。	オンラインによる 同時双方向演習
9	ソーシャルワーク・アプローチによる支援の実際と活用（発達すること、学ぶことへの支援）を提示する事例に照らし検討する。その際にはグループワークやロールプレイを用い、理解を深め、実践活用を図る。	オンラインによる 同時双方向演習
10	ソーシャルワーク・アプローチによる支援の実際と活用（支援システム、地域自立支援協議会など）を提示する事例に照らし検討する。その際にはグループワークやロールプレイを用い、理解を深め、実践活用を図る。	オンラインによる 同時双方向演習

■スクーリング事後課題（学修時間目安：30 時間）

「レポート課題」の課題2について、「アドバイス」の課題2を参考にして、4,000 字程度にまとめること。（受講した年度の1月までに提出。当年度の締切日を確認すること）。

■レポート課題

課題1 (事前課題の2)	障害者支援の史的展開を踏まえ、ソーシャルワークとの接点を確認し、障害がある人へのソーシャルワーク・アプローチによる支援モデルを考える。
課題2 (事後課題)	ソーシャルワーク・アプローチによる支援の実際について、支援方法や支援システムを、開発し、そのプロセスや評価法についても具体的に述べる。

※提出されたレポートは添削指導を行い返却します。

■アドバイス

(課題1)

「在宅学修15のポイント」を参考に、障害の概念、障害者支援の史的展開にかんする基礎的な知識を学修しておいてください。そして、ソーシャルワークの枠組み（視点・モデル・アプローチ）にかんする基礎知識を確認し、ソーシャルワーク・アプローチによる支援の実際について、事例研究などを通し具体的なイメージがもてるよう学修してください。

(課題2)

スクーリングでの学びを踏まえ、ソーシャルワークの視点から障害者支援の枠組みを示してみる。そして、ソ

ーシャルワーク・アプローチによる支援の実際（プロセス、評価ポイントなど）から、ソーシャルワーク・アプローチによる支援モデルを構築してみる。その際には、支援システムによる多機関連携やチームアプローチについても視点を置く必要がある。

■評価の方法・基準

- ・事前課題レポート(15% X 2)
- ・全スクーリング(50%)
- ・事後課題レポート(20%)

■参考文献（*印＝大学から送付される必読図書）

- 1) 中野敏子『社会福祉学は「知的障害者」に向き合えたか』高菅出版、2009 年
- 2) M.オリヴァー著 野中猛・河口尚子訳『障害者にもとづくソーシャルワーク』金剛出版、2010 年
- 3) C.A.ラップ R.J.ゴスチャ著 田中英樹訳『ストレングスモデルー精神障害者のためのケースマネジメント』金剛出版、2008 年
- 4) L.C.ジョンソン S.J.ヤンカ著 山辺朗子・岩間伸之訳『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房、2004 年
- 5) 岩田正美『社会的排除ー参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣、2008 年
- 6) 久保紘章・副田あけみ『ソーシャルワークの実践モデルー心理社会的アプローチからナラティブまで』川島書店、2005 年
- 7) 狭間香代子『社会福祉の援助観ーストレングス視点／社会構成主義／エンパワメント』筒井書房、2001 年
- 8) 横須賀俊司・松岡克尚『障害者ソーシャルワークへのアプローチーその構築と実践におけるジレンマ』明石書店、2011 年

2023～福祉プログラム開発と評価 ～サービス改善のための実践評価と実践研究の方法～	単位数	履修方法	配当学年
	2単位	SR	1・2年
	担当教員	大島 巖	

※この科目は、2023年度以降入学者に対して開講されている科目です。2022年度以前入学者は履修できません。

■授業のテーマ

実践現場の課題を見直し、課題解決のために取り組む支援サービスを、より質の高い効果的なものへと改善するために用いる「(福祉)プログラム開発と評価」の方法を習得し、実践現場に適用する。

■授業の目的

- ・受講者が関わる（あるいは関心をもつ）実践の課題に対して、実践の経過、判断や行動の根拠、成果と課題等について、「(福祉)プログラム開発と評価」の方法を用いて客観的に記述・言語化し、検証するための方法を身に付ける。
- ・社会福祉課題解決のために有効なサービスを生み出し、既存サービスをより質が高く、効果的なものへと改善するために必要な「プログラム開発と評価」の科学的な方法論を学び、実践の現場に適用させる。

■授業の到達目標

- ・受講者が関わる実践現場の課題に対して、自身の実践の経過、判断や行動の根拠、成果と課題等について、「プログラム開発と評価」の観点から整理して記述し、理論的に説明できる。
- ・受講者自身の実践について、科学的な「プログラム開発と評価」の方法を用いて評価し、評価から得た知見や示唆を説得力ある方法で発表できる。
- ・「プログラム開発と評価」の具体的な方法について、①ニーズ評価、②理論評価、③プロセス評価、④アウトカム・インパクト評価、⑤効率性評価、それぞれについて理解し、説明できる。

■授業の概要

- ・【1-1】社会福祉課題解決のために有効なサービスを生みだし、既存サービスをより質が高く、効果的なものへと改善するために必要な実践研究の意義と方法論を「プログラム開発と評価」の観点から概説する。
- ・【1-2】スクーリングで前項の質疑応答を行い、理解と知識を深める。受講生が関心を持つ実践現場の課題を共有し、「プログラム開発と評価」の観点から整理し、検討するグループワークを行う。
- ・【2-1】「プログラム開発と評価」の具体的な方法を、①ニーズ評価、②理論評価、③プロセス評価、④アウトカム・インパクト評価、⑤効率性評価、それぞれについてテキスト教材とオンデマンド授業で概説する。同時に①～⑤を、《1》制度の狭間問題への対応～効果モデルの設計・開発、《2》成果の上まらない制度モデルの改善・再設計、《3》効果モデルの形成・改善、エビデンス生成、《4》海外で効果立証されたEBPプログラムの導入という課題に適用させる方法を提示する。
- ・【2-2】スクーリングで質疑応答を行い、理解と知識を深める。受講生が関心を持つ実践現場の課題解決にどのように活用すれば良いのか、受講生が関心を持つ実践現場の課題に当てはめて整理する。
- ・【3】受講生が関心を持つ実践現場の課題に当てはめて、その課題解決に有効な研究計画・評価計画を作成する。スクーリングでは、その研究計画・評価計画を全体発表・共有して、意見交換する。

■在宅学修 15 のポイント

	学修のテーマ	学修内容(キーワード)	学びのポイント
1	総論 1：プログラム開発と評価とは	定義、二つの目的・アプローチ、評価者の立ち位置	授業の概要【1-1】福祉プログラム開発と評価の方法の概説を行う⇒テキスト 1 章

2	総論 2：評価の 5 階層	社会プログラムの設計・開発、形成・改善、実施・普及の方法	同上【1-1】社会プログラムの設計・開発、形成・改善、実施・普及の具体的方法を評価 5 階層の視点から概説⇒テキスト 2 章
3	総論 3：プログラム理論とロジックモデル	プログラムゴールとインパクト理論、プロセス理論	同上【1-1】社会課題解決の方法である社会プログラムの設計図であるプログラム理論・ロジックモデルについて概説⇒テキスト 2 章
4	各論 1-1：制度の狭間問題への対応～効果モデルの設計・開発(その 1)	制度の狭間問題のニーズ把握、背景要因、ターゲット集団、対応の好事例分析	同上【2-1】《1》ニーズ評価、理論評価の活用方法を概説する⇒テキスト 3 章、5 章
5	各論 1-2：同上(その 2)	プログラムスコープの構造、分析の方法、プログラム理論構築の方法	同上【2-2】《1》ニーズ評価の結果をまとめる方法として「プログラムスコープ」の活用方法を学ぶ⇒テキスト 3 章、5 章
6	各論 1-3：同上(その 3)	各実践現場におけるプログラム理論・ロジックモデルの活用方法	同上【2-2】《1》各実践現場の課題解決の方法に対して、プログラム理論・ロジックモデルを活用する方法を学ぶ⇒テキスト 3 章、5 章
7	各論 2-1：成果の上がない制度モデルの改善・再設計(その 1)	成果の上がない制度モデルの課題分析、ニーズ把握、背景分析、ターゲット集団分析、対応の好事例分析	同上【2-1】《2》ニーズ評価、理論評価の活用方法を概説する⇒テキスト 3 章、5 章
8	各論 2-2：同上(その 2)	各実践現場におけるプログラムスコープ分析、プログラム理論・ロジックモデルの活用方法	同上【2-2】《2》ニーズ評価の結果をまとめる方法として「プログラムスコープ」の活用方法、プログラム理論・ロジックモデルを活用する方法を学ぶ⇒テキスト 3 章、5 章
9	各論 3-1：導入した効果モデルの形成・改善、エビデンス生成(その 1)	導入した効果モデルの形成的評価、効果的援助要素、フィデリティ尺度、アウトカム評価との相関分析	同上【2-1】《3》導入した効果モデルのプロセス評価、アウトカム評価の活用方法を概説する⇒テキスト 3 章、6 章
10	各論 3-2：同上(その 2)	各実践現場の課題に対応した効果モデル、効果的援助要素、フィデリティ尺度の構築、モニタリング評価の方法	同上【2-2】《3》導入した効果モデルの形成・改善評価の方法、エビデンス生成方法を、各実践現場の実情に合わせて検討する⇒テキスト 3 章、6 章
11	各論 4：海外の EBP プログラムの導入とインパクト評価、効率性評価、実施・普及評価	導入した海外の EBP プログラムの技術移転の方法、アウトカム・インパクト評価、フィデリティ評価の方法	同上【2-1】【2-2】《4》導入した海外の EBP プログラムの技術移転、実装の方法を概説する⇒テキスト 3 章、7 章、8 章
12	各論 5-1：各実践現場における評価計画の策定(その 1)	評価の計画、データの収集・分析の方法、質的データの分析方法、量的データの分析方法	同上【3】質的・量的データの収集・分析の方法を含めた評価計画の策定方法を概説する⇒テキスト 3 章、9 章、10 章
13	各論 5-2：同上(その 2)	各実践現場における評価計画の策定方法、企画書の作成方法	同上【3】各実践現場における評価計画の策定方法、企画書の作成方法を学ぶ⇒テキスト 3 章、9 章、10 章
14	成果の報告 1：研究計画・評価計画を企画書にまとめて報告(その 1)	評価の計画、評価結果のまとめ・伝達と活用	同上【3】検討の結果まとまった研究計画・評価計画を企画書にまとめて報告。全体討論を行う⇒テキスト 3 章、4 章
15	成果の報告 2：研究計画・評価計画を企画書にまとめて報告(その 2)	評価の計画、評価結果のまとめ・伝達と活用	同上【3】検討の結果まとまった研究計画・評価計画を企画書にまとめて報告。全体討論を行う⇒テキスト 3 章、4 章

■スクーリング事前課題（学修時間目安：40 時間以上）

社会福祉課題解決のために有効なサービスを生みだし、既存サービスをより質が高く、効果的なものへと改善するために必要な実践研究の方法論である「プログラム開発と評価」を用いて、受講生が関心を持つ実践現場の課題にどのように当てはめれば良いのか、A4 用紙 2-3 枚にまとめて、事前提出をする（11/24 迄）。

■スクーリング授業計画

	授業の内容	授業の方法
1	在宅学修 15 ポイントの 1 の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
2	在宅学修 15 ポイントの 2 の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
3	在宅学修 15 ポイントの 3 の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
4	在宅学修 15 ポイントの 1-3 に関する解説と質疑応答	リモート授業 (11/4 or 11/5 に相談の上開講、1 コマ)
5	在宅学修 15 ポイントの 4 の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
6	在宅学修 15 ポイントの 5 の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
7	在宅学修 15 ポイントの 6 の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
8	在宅学修 15 ポイントの 4-6 に関する解説と質疑応答、各自課題に関する演習、ワークショップ、意見交換	対面・リモート授業 (11/26 or 12/3 に相談の上開講、1 コマ)
9	在宅学修 15 ポイントの 7 の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
10	在宅学修 15 ポイントの 8 の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
11	在宅学修 15 ポイントの 9 の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
12	在宅学修 15 ポイントの 10-11 の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
13	在宅学修 15 ポイントの 7-11 に関する解説と質疑応答、各自課題への評価計画に関する演習、ワークショップ、意見交換	対面・リモート授業 (12/22 or 12/23 に相談の上開講、1 コマ)
14	在宅学修 15 ポイントの 12-15 に関する成果の報告①	対面・リモート授業 (2023 年 1/20 or 1/21 に相談の上開講、連続 2 コマ)
15	在宅学修 15 ポイントの 12-15 に関する成果の報告②	対面・リモート授業 (2023 年 1/20 or 1/21 に相談の上開講、連続 2 コマ)

■スクーリング事後課題（学修時間目安：30 時間）

受講生が関心を持つ実践現場の課題に当てはめて、課題解決に有効な「福祉プログラム開発と評価」の方法を用いた研究計画・評価計画を、A4 用紙 3-5 枚程度（4000 字以上）にまとめて提出する。

■レポート課題

課題 1 (事前課題)	・社会福祉課題解決のために有効なサービスを生みだし、既存サービスをより質が高く、効果的なものへと改善するために必要な実践研究の方法論である「プログラム開発と評価」を用いて、受講生が関心を持つ実践現場の課題にどのように当てはめれば良いのか、A4用紙 2-3 枚にまとめて、事前提出をする (11/24 迄)
課題 2 (事後課題)	・受講生が関心を持つ実践現場の課題に当てはめて、課題解決に有効な「福祉プログラム開発と評価」の方法を用いた研究計画・評価計画を、A4 用紙 3-5 枚程度 (4000 字以上) にまとめて提出する

※提出されたレポートは添削指導を行い返却します。

■アドバイス

(課題 1)

スクーリングにおいて、「プログラム開発と評価」を当てはめる方法をお伝えし、グループワークで事前検討することになります。

(課題 2)

スクーリングにおいて、「プログラム開発と評価」を当てはめる方法をお伝えし、グループワークで事前検討することになります。

■評価の方法・基準

・スクーリング時の参加度 30%、プレゼンテーション 30%、研究計画・評価計画のレポート 40%とします。

■参考文献 (*印=大学から送付される必読図書)

- *1) 源由理子、大島巖編 (山谷清志監修) 『プログラム評価ハンドブック～社会課題解決に向けた評価方法の基礎・応用』晃洋書房.2020
- *2) 大島巖、源由理子、山野則子、賛川信幸、新藤健太、平岡公一編著『実践家参画型エンパワメント評価の理論と方法～CD-TEP 法：協働による EBP 効果モデルの構築』日本評論社.2019
- 3) ピーター・H・ロッシ、マーク・W・リプセイ、ハワード・E・フリーマン (大島巖、平岡公一、森俊夫、元永拓郎 監訳) 『プログラム評価の理論と方法～システムティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド』日本評論社. 2005
- 4) 大島巖『マクロ実践ソーシャルワークの新パラダイム～エビデンスに基づく支援環境開発アプローチ：精神保健福祉への適用例から』有斐閣.2016
- 5) 古屋龍太、大島巖編著『精神科病院と地域支援者をつなぐ みんなの退院促進プログラム～実施マニュアル&戦略ガイドライン』ミネルヴァ書房. 2021

特別研究講義Ⅱ (TFU 実学臨床研究セミナー)	単位数	時間数	履修方法	配当学年
	2単位	22.5 時間	SR	1・2 年
	担当教員	三浦 剛 他		

■授業のテーマ

包摂社会をつくる ～新たな社会的排除の解決に向けて

日本の地域社会や家族は、近年大きく変化、多様化し、新たな生活障害や、孤独・孤立などの社会的排除を生んでいる。この授業では「TFU 実学臨床研究セミナー」を通して、家庭や地域で起きているこれらの課題やその実態を把握し、また、その解決・解消をめざす包摂社会をつくるためのソーシャルワーク、多職種連携、人材養成などの実際とあり方について、各回のテーマに沿って展開していく。

■授業の目的

- ・変化、多様化する家族と地域社会の有する問題を把握する。
- ・その解決・解消のための各分野からの取り組みを学ぶ。

■授業の到達目標

- ・今日の変化、多様化する家族と地域社会の有する問題を整理し、発生する機序を説明することができる。
- ・その解決・解消のための各分野からの取り組みを理解し、包摂社会づくり(ソーシャルインクルージョン)のための方法を具体的にイメージすることができる。

■授業の概要

社会的包摂をめざす、各分野あるいは多機関連携による取り組みを、月 1 回開催される「TFU 実学臨床研究セミナー」で、各分野の講師がリアルタイムに展開するとともに、計 3 回の対面、オンラインによる受講の準備、確認、まとめを行い、実学臨床研究の視点、視座などについて確認する。

なお、以下のような内容を予定している。

1. 「新たな社会問題に向き合う」第一線で活躍するソーシャルワーカーや社会活動家を招き、変化、多様化する社会の状況を共有する。【セミナー 4 回分を充てる】
2. 「地域社会、支援の現場から」このセミナーの実施に協働で取り組んでいる本学の関連法人や社会福祉士会などの職能団体などから、地域づくり（社会資源開発）や多職種連携、人材育成などの実際を伺い、社会的包摂を目指す取り組みのあり方、方法を検討する。【セミナー 2 回分を充てる】
3. 「実学臨床研究の今」 本学の教員からその専門分野に関する最新の研究、実践を紹介する。【セミナー 4 回分を充てる】
4. 「実学臨床研究への誘い」 本大学院で学び、研究的実践家や実践研究者として活躍する卒業生などから、大学院での研究、その後の実践との結びつきなどについて、パネルディスカッションなどの方法で紹介する。【セミナー 2 回分を充てる】

■スクーリング授業計画 ※企業等との連携（企業等と協議を重ねて授業内容を編成）

	授業の内容	授業の方法
1	【実学臨床研究とは何か】 セミナーを受講するにあたって学修目標の設定などの準備をする（三浦剛他）	対面・オンライン・オンデマンドで開講 （4月21日）
2	「TFU 実学臨床研究セミナー第1回」 1. 権利擁護と当事者主体 1-1 権利擁護と成年後見（竹之内章代）	対面・オンライン・オンデマンドで開講 （4月28日）
3	「TFU 実学臨床研究セミナー第2回」 1. 権利擁護と当事者主体 1-2 困難女性支援におけるより添い支援（八幡悦子）	対面・オンライン・オンデマンドで開講 （5月26日）
4	「TFU 実学臨床研究セミナー第3回」 1. 権利擁護と当事者主体 1-3 リカバリー志向サービス発展の可能性※企業等との連（大島巖）	対面・オンライン・オンデマンドで開講 （6月29日）
5	「TFU 実学臨床研究セミナー第4回」 対人援助におけるコミュニケーション技術（武村尊生）	対面・オンライン・オンデマンドで開講 （7月未定）
6	「TFU 実学臨床研究セミナー第5回」 実践課題解決に役立つ「実践研究の方法」(三浦剛、修了生)	対面・オンライン・オンデマンドで開講 （8月25日）
7	【これまでの振り返り】 これまで5回のセミナーを振り返りまとめを行い、6回以降のセミナーでの学修目標を考える（三浦剛）	対面・オンライン・オンデマンドで開講 （7月未定）
8	「TFU 実学臨床研究セミナー第6回」 2. 地域とつながる・地域を作る 2-1 認知症フレンドリー社会の取り組み（未定）	対面・オンライン・オンデマンドで開講 （9月未定）
9	「TFU 実学臨床研究セミナー第7回」 2. 地域とつながる・地域をつくる 2-2 社会的孤立の予防と地域づくり～東日本大震災復興支援の経験に基づく質的研究から（石附敬、芳賀恭司）	対面・オンライン・オンデマンドで開講 （10月27日）
10	「TFU 実学臨床研究セミナー第8回」 （福祉系職能団体コラボ企画） 地域共生社会におけるソーシャルワーカーの役割とは（未定）	対面・オンライン・オンデマンドで開講 （11月25日）
11	「TFU 実学臨床研究セミナー第9回」 3. 地域包括ケアと多職種連携 3-1 住み慣れた地域で暮らすことを支援する～老人保健施設における実践から（土井勝幸）	対面・オンライン・オンデマンドで開講 （12月21日）

12	「TFU 実学臨床研究セミナー第 10 回」 3. 地域包括ケアと多職種連携 3-2 障がいのある子どもと家庭を支えるシステムづくり（小林紀代）	対面・オンライン・オンデマンドで開講 (2024年1月26日)
13	「TFU 実学臨床研究セミナー第 11 回」 社会福祉におけるスーパービジョン（田中尚）	対面・オンライン・オンデマンドで開講 (2月16日)
14	「TFU 実学臨床研究セミナー第 12 回」 シンポジウム 社会課題解決に向けた包摂（インクルーシブ）社会とは(大学院担当教員)	対面・オンライン・オンデマンドで開講 (3月2日)
15	【まとめ】 セミナー全体を振り返り、目標の達成状況を整理する（三浦剛）	対面・オンライン・オンデマンドで開講 (3月2日)

■レポート課題

課題 (事後課題)	社会課題解決に向けた包摂（インクルーシブ）社会とは。セミナーを通じて学んだことをまとめなさい。
---------------------	---

■評価の方法・基準

- ・「TFU 実学臨床研究セミナー」への出席と各回の課題の提出(5%×12)
- ・事後課題レポート（40%）

■参考文献

各担当講師作成の資料等

2023～	生活困窮者支援と貧困研究	単位数	履修方法	配当学年
		2単位	SR	1・2年
		担当教員	阿部 裕二	

※この科目は、2023年度以降入学者に対して開講されている科目です。2022年度以前入学者は履修できません。

■授業のテーマ

貧困と低所得の意味を踏まえながら、多様化・複雑化する対象者に対する支援の方法を考える

■授業の目的

貧困（未就労、低所得、失職、借金、税・社会保険料滞納）とその固定化に対する支援について学ばせる。

■授業の到達目標

労働問題及び格差等の背景と実態を把握し、制度等を活用しながらソーシャルワークを展開できる。

■授業の概要

現代社会において、貧困・低所得といっても一様ではない。貧困概念の拡大を踏まえ、現代の貧困・低所得の現状とその原因・背景を理解するとともに、各種自立に向けた支援の実際について検討する。その際、多職種・多機関の連携を視野に入れながら進める。

■在宅学修15のポイント

	学修のテーマ	学修内容(・キーワード)	学びのポイント
1	格差と拡大する貧困概念に関する理解	・格差 ・絶対的貧困 ・相対的貧困、相対的剥奪 ・社会的排除 ・ケイバビリティの欠如	各種格差と多様な貧困の概念を整理するとともに、それぞれの特徴と関係性について学ぶ。
2	貧困状態にある人の生活実態と生活環境はどのようなになっているのか	・高齢者世帯 ・傷病・障がい者世帯 ・ひとり親（母子）世帯など	なぜ貧困が生じるのか、そして経済的困難さは何をもたらすのかについて、リスターなどの理論を参考にしながら考察する。
3	社会は貧困をどのようにみているのか	・人権と尊厳の尊重 ・自己責任論と社会責任 ・貧困の文化論 ・スティグマ	貧困に対する価値観の変容についてまとめるとともに、人権と尊厳の重要性について再確認する。
4	貧困に対する諸施策にはどのようなものがあるのか①	・生活保護制度 ・ラストセーフティネット	ラストセーフティネットとして生活保護制度の仕組みと諸問題について、「最低生活の保障」と「自立の助長」の視点から理解する。その際、自立は「経済的自立」「社会的自立」「日常生活自立」など多様な意味があることも理解する。
5	貧困に対する諸施策にはどのようなものがあるのか②	・生活困窮者自立支援制度 ・第2のセーフティネット	第2のセーフティネットとしての生活困窮者自立支援制度について、「救貧」と「防貧」の視点から課題も含めて理解する。
6	貧困に対する諸施策にはどのようなものがあるのか③	・生活福祉資金貸付制度 ・公営住宅 ・無料低額診療事業 ・無料低額宿泊所	生活保護制度や生活困窮者自立支援制度以外の貧困に対する施策について、役割と関係性について学ぶ。
7	貧困に対する諸施策にはどのようなものがあるのか④	・ホームレスの自立の支援に関する特別措置法	日本でのホームレスの意味と、対策の一つとしての時限立法である「ホームレスの自立の支援に関する特別措置法」の内容と特徴について学ぶ。

	学修のテーマ	学修内容(・キーワード)	学びのポイント
8	貧困に対する支援における関係機関と専門職の役割	・福祉事務所など	福祉事務所などの機能と現業員および査察指導員の役割と関係性について整理するとともに、現業員の福祉労働の二重性についても学ぶ。
9	「自立」と「自律」の視点から貧困に対する支援を考える。	・自立(就労自立・日常生活自立・社会生活自立) ・自律	「自立・自律」を支援するとは何か、ここでは「自立」と「自律」の相違と関係性を踏まえつつ、それぞれの支援の特徴について学ぶ。
10	生活保護制度を活用した支援の実際	・相談援助活動 ・自立支援プログラム	自らの実践のなかから生活保護における相談支援の実例を挙げ、支援の構造と問題点について考察する(経験的事例がなければ、文献を参照してまとめること)。
11	生活困窮者自立支援制度を活用した支援の実際	・自立相談支援機関 ・必須事業と任意事業	自らの実践のなかから生活困窮者自立支援制度における自立支援の実例を挙げ、支援の構造と問題点について考察する(経験的事例がなければ、文献を参照してまとめること)。
12	低所得者に対する支援の実際	・生活福祉資金貸付制度 ・公営住宅 ・無料低額診療事業 ・無料低額宿泊所	自らの実践のなかからたとえば、新型コロナウイルス感染症拡大により脚光を浴びた生活福祉資金貸付制度を通じた自立支援の実例を挙げ、支援の構造と問題点について考察する(経験的事例がなければ、文献を参照してまとめること)。
13	住居不安定者・ホームレスの自立支援の実際	・ホームレスの定義 ・ホームレスの実態に関する全国調査	自らの実践のなかから生活不安定者・ホームレスに対する自立支援の実例を挙げ、支援の構造と問題点について考察する(経験的事例がなければ、文献を参照してまとめること)。
14	精神障害者に対する支援の実際	・社会生活適応訓練事業	自らの実践のなかから精神障がい者に対する自立支援の実例を挙げ、支援の構造と問題点について考察する(経験的事例がなければ、文献を参照してまとめること)。
15	多機関・多職種などの連携の重要性	・多機関・多職種 ・住民、企業との連携 ・地域づくり ・参加の場(居場所)づくり	まとめとして、貧困支援として多機関・多職種の連携の重要性を学ぶ。また、格差の意味や多様化する貧困概念の拡大を踏まえ、現行の支援の諸施策の概要と対応の限界について述べなさい(「レポート課題」の課題1に相当)。

■スクーリング事前課題(学修時間目安:35時間以上)

- 1)「在宅学修15のポイント」の1～14までを学修し、それぞれにまとめる(対面の演習の1週間前に提出)。
- 2)「レポート課題」の課題1について、「アドバイス」の課題1を参考にして、4,000字程度にまとめること(「在宅学修15のポイント」の15に相当。対面の演習の1週間前に提出)。

■スクーリング授業計画

	授業の内容	授業の方法
1	戦後日本における貧困の「かたち」がいかに変容したのかについて講義する。受講生は、戦後における貧困の変容について理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
2	「ポーガムの貧困論」の視点から日本の貧困の実態について講義する。受講生は、その貧困の実態を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
3	「見える貧困」のみならず「見えない貧困」をとらえる視点の在り方について講義する。受講生は、「見えない貧困」をとらえる視点を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
4	「コロナ禍」における貧困・生活困窮者支援の多様化と限界について講義する。受講生は、「コロナ禍」が貧困へ及ぼす影響を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
5	「自立支援」という政策目標の功罪と「自律」との関係性について講義する。受講生は、自立支援と自立の関係を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド

	授業の内容	授業の方法
6	貧困・生活困窮者支援における「公的支援」と「民間支援」の関係性について講義する。受講生は、「公的支援」と「民間支援」の関係性を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
7	「高齢者世帯」について、制度論及びソーシャルワーク・アプローチによる支援の実際と活用を、様々な参考文献から見られる事例又は自身の実践経験に照らし検討する。その際にはグループワークなどを用い、理解を深める。	対面の演習
8	「ひとり親世帯」について、制度論及びソーシャルワーク・アプローチによる支援の実際と活用を、様々な参考文献から見られる事例又は自身の実践経験に照らし検討する。その際にはグループワークなどを用い、理解を深める。	対面の演習
9	「傷病・障害者世帯」について、制度論及びソーシャルワーク・アプローチによる支援の実際と活用を、様々な参考文献から見られる事例又は自身の実践経験に照らし検討する。その際にはグループワークなどを用い、理解を深める。	対面の演習
10	「住所不安定者・ホームレス」について、制度論及びソーシャルワーク・アプローチによる支援の実際と活用を、様々な参考文献から見られる事例又は自身の実践に照らし検討する。その際にはグループワークなどを用い、理解を深める。	対面の演習

■スクーリング事後課題（学修時間目安：30時間以上）

「レポート課題」の課題2について、「アドバイス」の課題2を参考にして、4,000字程度にまとめること（受講した年度の1月までに提出。当年度の締切日を確認すること）。

■レポート課題

課題1 (事前課題の2)	格差の意味や多様化する貧困概念の拡大を踏まえ、現行の支援の諸施策の概要と対応の限界について述べなさい。
課題2 (事後課題)	スクーリングにおいて取り上げた貧困・生活困窮者の「世帯」を一つ取り上げ、ソーシャルワーク・アプローチによる支援の枠組みと支援の際の留意点について述べなさい。

■アドバイス

**課題1
アドバイス**
格差にはさまざまな格差が存在するが、格差の根底には「貧困・生活困窮」があることを理解するとともに、絶対的貧困から拡大する貧困概念の把握が重要である。その上で、ライスセーフティネット（第3のセーフティネット）に位置づけられる生活保護制度など、重層的な生活支援システムを再整理し、これらシステムの限界についても考察することが肝要である。

**課題2
アドバイス**
スクーリング（同時双方向または対面の演習）では「高齢者、ひとり親、傷病・障害者、住所不安定・ホームレスなど」の世帯を取り上げ、それぞれの世帯について、制度論及びソーシャルワーク・アプローチによる支援の実際と活用を、自身の実践に照らし検討した。そのうちの1つの世帯を取り上げて、ソーシャルワーク・アプローチによる支援の枠組みと支援の際の留意点について自身の考えを述べること。

■評価の方法・基準

- ・事前課題レポート（15%×2）
- ・全スクーリング（50%）
- ・事後課題レポート（20%）

■参考文献（*印=大学から送付される必読図書）

- 1) 朝比奈ミカ、菊池馨実『地域を変えるソーシャルワーカー(岩波ブックレット)』岩波書店、2021年
- 2) 阿部裕二監修『ケアマネ、生活相談員、生活支援員のための社会保障制度がわかる本』ナツメ社、2021年
- 3) 伊藤秀一責任編集『貧困に対する支援』弘文堂、2022年

- 4) 岩田正美『貧困の戦後史－貧困の「かたち」はどう変わったのか』筑摩書房、2017年
- * 5) 金子充『入門 貧困論』明石書房、2017年
- 6) 酒井正『日本のセーフティネット格差－労働市場の変容と社会保障－』慶應義塾大学出版会、2020年
- 7) 佐藤康仁、熊沢由美『~~新版~~ 格差社会論^(増3版)』同文館、20~~23~~²⁵年
- 8) 「貧困研究」編集委員会編『貧困研究』(各号) 明石書房
- * 9) 棕野美智子編『福祉政策とソーシャルワークをつなぐ』ミネルヴァ書房、2021年

授業科目名		【BPシラバス】 特別研究講義Ⅰ(公開講座)	授業形態	SR	時間数	12時間	単位数	1単位
担当教員名		大島 巖・竹之内章代・芳賀恭司・庄子清典・野田 毅・田中伸弥・小渡加依						
受講する時の留意点 (注意事項)		※ 所属する社会福祉法人があり、福祉現場での実践の経験があること（経験がないと演習や実施報告の課題が作成できない恐れがあるため） ※ 現場でのプランを検討したり、実施したりすることが課題として求められているため、それらが可能な立場にあること						
授業のテーマ		地域の福祉課題解決に貢献する福祉等施設の公益活動～人も資金も集まり社会に役立つ「打ち手」の創出と展開						
授業の目的		1. 社会福祉等事業の経営者や公益事業担当者、法人におけるソーシャルワーカー等職員が、有効な地域公益事業の実践理論と方法を共有することができる。 2. 自らが所属する法人等における公益的な取組を見直し、より有効な地域貢献事業を計画し、法人内での共有から実行、さらにその効果や成果の検証ができる。						
到達目標（学習成果）		1. 社会福祉事業において、公益事業の必要性と有効な理論について考察を深め、具体的な方策を提案することができる。 2. 社会福祉法人に求められる使命を理解し、法人の運営や人材育成等について、ソーシャルワーク理論や実践から考察することができる。						
授業の概要		2016年改正社会福祉法において、社会福祉法人の公益性・非営利性を踏まえた「地域における公益的な取組」の実施に関する責務規定が創設された。さらに、2020年の改正では地域共生社会の実現を目指した包括的支援体制の構築が謳われている。そこでこの講義では、社会福祉法人に求められる「地域に根ざした公的事业」実施にあたって必要となる理論と好事例を講義から、さらにワークショップを通じて具体的な実践方法を学ぶ。これらの実践と学びが、法人での人材確保や経営の安定、地域貢献につながることを実感できる講義となることを期待する。						
授業の進め方と方法		この講義は、必要に応じて「オンデマンド」「オンライン」「対面」あるいは「オンライン+対面」など、授業形態の工夫をしながら進めていく。講義の構成としては、講義を通じて「実践理論」や「好事例」から学び、さらにワークショップ形式による「事業計画の立案」、インターバルにおいて「事業計画の実施とその成果」についての報告を実施する。						
成績評価の方法と基準		各回の授業での成果物30%、演習等への参加度30%、最終レポート40%						
課題へのフィードバック		課題については、授業中にフィードバックをします。						
テキスト		講師作成資料を配付						
授 業 計 画 ※社会福祉法人等との連携（社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成）								
第1回	テーマ	オリエンテーション（庄子・野田・田中・竹之内） 総論1 社会福祉法人における公益事業の取り組みについて（法的根拠や背景、法人における考え方・方針と事業展開）	内 容	この講義の進め方についての確認を行う。 地域における公益的な取組が実施される背景と社会的意義・役割、現在の取組み状況を共有する。 ※実務家教員・実務家による授業 ※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（内容に沿って受講生を含めた意見交換を実施）				
第2回	テーマ	総論2（竹之内・大島） 法人をとりまく地域課題の分析と抽出、課題解決に有効なプログラム開発と評価の方法	内 容	社会福祉法人等が取り組む有効な地域公益事業の実践理論を学ぶ。 ニーズ把握から打ち手の創出、計画の策定、モニタリングや検証等の方法論について学ぶ。 ※実務家教員による授業 ※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（内容に沿って受講生を含めた意見交換を実施）				
第3回	テーマ	実践事例報告1（野田・小渡） 社会福祉法人における公益事業の取り組み	内 容	社福）東北福祉会の取組み ※実務家による授業 ※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等からの事例報告等による授業及び企業等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（内容に沿って受講生を含めた意見交換を実施）				

第4回	テーマ	実践事例から何を学ぶか1（大島・竹之内） 「プログラム開発と評価」の視点から実践事例の分析・検討と共有①	内 容	「プログラム開発と評価」の視点から実践事例報告に対する振り返りと、参加者の各自の実践との関連性の検討と共有を行う。 ※実務家教員による授業 ※※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（内容に沿って受講生を含めた意見交換を実施）
第5回	テーマ	実践事例報告2（田中） 社会福祉法人における公益事業取り組み	内 容	社福）ライフの学校の取組み ※※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（内容に沿って受講生を含めた意見交換を実施）
第6回	テーマ	実践事例から何を学ぶか2（大島・竹之内） 「プログラム開発と評価」の視点から実践事例の分析・検討と共有②	内 容	「プログラム開発と評価」の視点から実践事例報告に対する振り返りと、参加者の各自の実践との関連性の検討と共有を行う。 ※実務家教員による授業 ※※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（内容に沿って受講生を含めた意見交換を実施）
第7回	テーマ	演習1（竹之内・大島・野田・田中・芳賀） 参加者の各自実践の「打ち手」の開発・創出、事業実施計画の策定	内 容	これまでの講座を踏まえ、各自組織における公益的取組について分析し、見直しと計画の策定を行う。 ※実務家教員・実務家による授業 ※※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（少人数に分かれてグループディスカッションを実施）
第8回	テーマ	演習2（竹之内・大島・野田・田中・芳賀） 開発・創出した「打ち手」と事業実施計画の報告・全体共有	内 容	各自組織における「打ち手」と実施計画を報告し、ディスカッションを行う。口講座全体を振り返り、今後の課題とあり方について全体共有する。 ※実務家教員・実務家による授業 ※※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（少人数に分かれてグループディスカッションを実施）
最終レポート課題		演習において作成した実施計画書について、全体共有で得た課題を踏まえ、修正案を作成し、提出すること。また、講義全体を通じて、具体的にどのような学びをし、その学びを実践活動にどのように活かすかについて、述べよ。		
教員への質問・相談		授業終了後もメール等で受け付ける。		
備考		企画案に基づく実施状況を、2023年12月にフォローアップ講座を行う予定です。		

2023～	実践事例検討とスーパービジョン	単位数	履修方法	配当学年
		2単位	SR	1・2年
		担当教員	田中 尚・竹之内 章代	

※この科目は、2023年度以降入学者に対して開講されている科目です。2022年度以前入学者は履修できません。

■授業のテーマ

福祉実践現場での事例の検討を行いながら、実践活動の構造、その中で求められるソーシャルワークの価値、知識、介入方法と技術の明確化を図り、教育的、支持的、管理的な視点からのスーパービジョンを行う。

■授業の目的

社会福祉の実践事例検討を学ぶことにより、事例の理解を深め、ソーシャルワーカーとしての理論に基づいた実践力を向上させる。加えて、スーパービジョンを実施することにより、受講者の専門職としての自らと その実践への省察を進め、高度な実践力の定着を図る。

■授業の到達目標

1. 社会福祉実践における実践事例検討を、ソーシャルワーク・モデルや理論の生成に至る方法の一部として位置づけ、それを応用し、新たな知見を見いだす試みを実践することができる。
2. スーパービジョンを受けることで、自らの実践力を高めるとともに、その根拠を説明することができる。

■授業の概要

本授業では、実践事例検討とスーパービジョンにより、社会福祉専門職としてのより高度な実践力の体得を目指す。ここでは社会福祉現場での事例を、専門的知識や専門的技術、さらにソーシャルワークの価値・倫理をベースに検討する。スクーリングでは、まず実践における事例検討とスーパービジョンの意義や目的を知ること、さらに実践を支える専門的知識や技術、倫理について学ぶ。これらの基本的な視点を学んだ上で、さまざまな実践分野からの実践事例を用いて、受講者とともに検討を行う。検討の中から導き出された実践や研究的な視点を、グループスーパービジョンによって気づかせ、より高度な実践力を獲得させることを目指す。

■在宅学修15のポイント

	学修のテーマ	学修内容(キーワード)	学びのポイント
1	実践研究の基本的な考え方	実践、実践研究、反省的実践	実践研究とは何か、実践を通して研究とはどのようなことであるのかについて考える。
2	実践現場における実践研究の基本的な考え方	現場実践、実践研究、実践の質の向上	実践現場とはどのような場であり、そこで何をどのように研究するかについて考える。
3	事例報告の方法の基本的な考え方	実践事例報告の意味、事例報告の方法・様式	実践事例をどのように報告するのか、また、そのための方法・様式のあり方などを学ぶ。
4	事例検討の方法と基本的な考え方	実践事例の検討、検討の方法と基本姿勢・態度	実践事例をそのように報告し、検討するのかについて、その方法を学ぶ。
5	スーパービジョンの基本的な概念	スーパービジョンとその定義、意義、歴史	スーパービジョンの基本的な理解として、その定義、必要性、歴史などについて学ぶ。
6	スーパービジョン関係	スーパーバイザー、スーパーバイジー、関係	スーパービジョンにおけるバイザー・バイジー関係の重要性、その意味について多角的に学ぶ。
7	スーパービジョンの機能：管理的機能	スーパービジョンの管理的機能	スーパービジョンにおける管理的機能の内容とその意義について学ぶ。
8	スーパービジョンの機能：教育的機能	スーパービジョンの教育的機能	スーパービジョンにおける教育的機能の内容とその意義について学ぶ。

	学修のテーマ	学修内容(キーワード)	学びのポイント
9	スーパービジョンの機能：支持的機能	スーパービジョンの支持的機能	スーパービジョンにおける支持的機能の内容とその意義について学ぶ。
10	スーパービジョンの方法	契約、形態、方法、効果評価	スーパービジョンの方法について、その準備、契約のあり方、方法などについて学ぶ。
11	スーパービジョンの実際：マイクロレベルのSV	マイクロレベルの実践とスーパービジョン	マイクロレベルの実践における管理的、教育的、支持的な機能について学ぶ。
12	スーパービジョンの実際：メゾレベルのSV	メゾレベルの実践とスーパービジョン	メゾ（地域・組織）レベルの実践における管理的、教育的、支持的な機能について学ぶ。
13	スーパービジョンの実際：マクロレベルのSV	マクロレベルの実践とスーパービジョン	マクロレベルの実践における管理的、教育的、支持的な機能について学ぶ。
14	スーパービジョンにおける留意点	スーパービジョンの効果、実施上の課題	スーパービジョンの効果と評価について多角的に把握する視点について学ぶ。
15	スーパービジョンの実施体制	スーパービジョンを行う環境、体制、基本要件	スーパービジョンを実施するうえでの環境要件、体制などについて学ぶ。

■スクーリング事前課題（学修時間目安：10時間以上）

1. 初回スクーリングの事前課題 テキストを読み、実践事例研究の理論と枠組みを把握しておく（5時間程度）。
2. 3回目スクーリングの事前課題 テキストを読み、スーパービジョンの理論と方法について理解しておく（5時間程度）。
3. 5回目スクーリングの事前課題 認定社会福祉士制度スーパービジョン実施要項を読み、自己チェックシート、契約書、誓約書などスーパービジョンを受けるにあたって必要な書類を作成しておく（2時間程度）。

■スクーリング授業計画

	授業の内容	授業の方法
1	事例検討の方法（実践事例の分析枠組み、対象や分野ごとの検討方法）	オンデマンド
2	事例検討の実際（受講者それぞれの実践事例の検討課題を抽出し、実際に検討する）	オンデマンド
3	スーパービジョンの理論と枠組み（スーパービジョンの理論と方法について学び、スーパーバイザーとして必要な基礎知識を知る）	オンデマンド
4	スーパービジョンの実際（認定社会福祉士制度において提出が必要な様式の説明なども含む）	オンデマンド
5	グループスーパービジョンの準備（グループ構成、取り扱う事例、メンバーの波長合わせなどを行う）	オンデマンド
6	グループスーパービジョン①	対面／オンデマンド
7	グループスーパービジョン②	対面／オンデマンド
8	グループスーパービジョン③	対面／オンデマンド
9	グループスーパービジョン④	対面
10	グループスーパービジョン⑤	対面
11	グループスーパービジョン⑥	対面
12	グループスーパービジョン⑦	対面
13	グループスーパービジョン⑧	対面
14	振り返り（個別に自己チェックシートと毎回の個人記録を照合しスーパービジョンの自己評価を行う）	対面
15	総括（これまでの学びのまとめとその報告会）	対面

■スクーリング事後課題（学修時間目安：10時間）

1. 認定社会福祉士制度の様式第7号スーパーバイザー個人記録を用い、実践事例検討で見出した実践、新たな知

見、また高度な実践家としての自らの課題が、スーパービジョンによってどれくらい定着したのか、振り返りを行う。

2. この授業を通して気づいたより高度な専門職としての自らの課題と、その解決方法をまとめなさい。

■レポート課題

課題 1 (事前課題)	(1) 実践事例研究の理論と枠組みについてまとめなさい (スクーリング初日までに提出)。 (2) スーパービジョンの理論と方法についてまとめなさい (スクーリング 3 日目までに提出)。 (3) 認定社会福祉士制度の必要書類の提出 (スクーリング 5 日目までに)。
課題 2 (事後課題)	この授業を通して気づいたより高度な専門職としての自らの課題と、その解決方法をまとめなさい。

※提出されたレポートは添削指導を行い返却します。

■アドバイス

課題 1 アドバイス

テキストなどを用いて、実践事例検討とスーパービジョンの枠組みをしっかりと理解したうえで、スーパービジョンを受けられるよう準備をしましょう。提出されたレポートは授業の中で添削指導します。

課題 2 アドバイス

スーパーバイザーとしてグループスーパービジョンを受講するにあたり作成した自己チェックシートと毎回の個人記録を照合し、より高度な社会福祉専門職としての専門性が身についたか、確認しておきましょう。

■評価の方法・基準

- ・スクーリングの参加度 (25%)
- ・スクーリングにおけるプレゼンテーションや取り組む姿勢 (25%)
- ・事後課題レポート (50%)

■参考文献 (*印=大学から送付される必読図書)

- 1) 岩田正美他編 (2006)『社会福祉研究法：現実世界に迫る 14 レッスン』有斐閣アルマ。
- 2) 渡部律子 (2007)『基礎から学ぶ気づきの事例検討会：スーパーバイザーがいなくても実践力は深められる』中央法規出版。
- * 3) 野口定久他編 (2014)『ソーシャルワーク事例研究の理論と実際：個別援助から地域包括ケアシステムの構築へ』中央法規出版
- 4) 日本ソーシャルワーク教育学校連盟監修 (2015)『ソーシャルワークスーパービジョン論』中央法規出版